

〔研究ノート〕

**アナログレコードのオークション価格
—— 価格形成要因としての神話と象徴 ——**

横川 潤

〔Research Notes〕

**Price of Analogue Record at Auction
—— Myth and Symbol as factors of Price formation ——**

Jun YOKOKAWA

This research note is focusing on the formation of analogue record at auction. It sounds odd that just a 2,500 yen record could have the price of 25,000 yen or more. Assuming that myth and symbol of records should be factors for increasing their price, many examples are examined here. Records of Beatles are ideal examples to contemplate the relationship between the price and myth. First there are many stories about Beatles. On the other hand, there are many stories about recordings. For example, the stereo record of Please Please Me, the first album of Beatles, is considered to be one of the most expensive one in history. That is because the number of press is quite low, probably less than 1,000, considering the fact that just 10 percent of Great Britain have stereo at that time. And the record is called Gold Parlophone, the gold letters printed at the black label. This design is soon disappeared as the change of label design by EMI and its rarity is highly improved. Gold Parlophone is a symbol of rarity and history. In the same context, the first press of record is the symbol of rarity and history. The key to identify originals is crucial for collectors. For example, fonts, jacket, misspell, and matrix number are strong sign to make sure its time of appearance. Regarding to SGT pepper's lonely hearts club band, so called Wide Spain is the sign of first press. It is said that Paul McCartney insists on making it for looks like his favorite Jazz album. But probably because of cost problem, Wide Spine is soon disappeared from the market and the fact enhances the rarity of the record. There is a serial number on White Album indicating its time of producing. So, the serial number of 0000005 was sold at auction at incredibly high price as 0000001 was owned by John Lennon (Now, Paul declares that Ringo Starr has it now). And it is said that earlier press are better than latter in terms of recoding sound. However enthusiast of records of Beatles, it is rather a symbol rather than the fact of good sound. It is the same as in Classical music and record with myth and symbol would be bought at enormously high price. In Classical records, the design of label is quite important as it can be the sign of the time of press and the evidence of good manufacturing.

低迷の続く音楽市場でアナログ盤レコード(以下レコードと略す)の販売数は珍しく好調に推移している。レコード市場の活況は単なるビジネス上の関心に止まらず、価格形成という面で尽きせぬ興味をそそる人間洞察の対象と他ならない。

価格はいう迄もなくマーケティングミックス(4P)の構成要素でマーケティングの主要テーマである。レコードは1枚2,500円程度で販売された初回版に対して数万、数十万、あるいは百万円のプレミアがつき、オークション等を通じて広く一般大衆が価格形成に参加しうる意味で、相当の特殊性を備えた商品といえる。

本稿ではレコードのプレミアという価格形成に着目し、個々の具体的例証を読み解いて消費者心理の理解に務めたい。

1. 落札価格の形成

1-1) 嗜好品・贅沢品の価格形成

近年のネットオークションはレコード価格形成の観察対象として極めて興味深い。価格形成の参加者は世界中のネットユーザーで、限られた予算で購買意欲のあるレコードに対してビット(bit)を行う。ネット社会のオークションは万人の価格形成に参画し得て、一切の政治的・行政的な介入のない意味で、優れて民主的な決定プロセスといえる。そしてビットによる価格形成プロセスは、参加者の多様なバックグラウンドの反映である上、おのずと主観的かつ恣意的とならざるを得ないが、その落札価格は意外なほど一定の範囲内に落ち着いている。

世界最多の利用者数を誇るネットオークションサイトはebayで、その落札価格はCollectorsFrenzyというサイトで閲覧可能である。日本最大のネットオークションサイトはヤフオク!で、有料サイトのaucfanが3年分の落札価格情報を提供している。両者を比較すると価格形成の傾向は意外なほど似通い、例えばヤフオク!の利用者がCollectorsFrenzyを参照している可能性はあるにせよ、言ってみれば商品としてのレコードに対する「価格コンセンサスのグローバルスタンダード」の成立を見つつある。

しかし音楽鑑賞は言う迄もなく感覚的な行為で、その対象たるレコードの価値判断は各個人の主観に委ねられる他ない。その意味で同じく感覚的な行為に他ならぬ「美食」と似た一面を持ち、各個人の嗜好は大きく異なるにも関わらず、価格形成では一定のコンセンサスが存在している。判断基準のいきおい主観的で曖昧となる嗜好品・贅沢品では、かえって共通の価値認識の基盤となる「物語」の登場が期待され、逆に市場価値を支配していく構造が透かし見える。「物語」が「信仰」の域に達すれば「神話」と化し、その文脈でモノやコトに対して顕著な価値を与える符号——「象徴」——が立ち現れる。象徴の権威の源泉たる神話は、また象徴の力によって権威づけられる。

この様に嗜好品・贅沢品の価格形成は神話と象徴という謎めいた力学の支配下に置かれている。およそ数量的な解析とはなじまぬが、かつてボードリヤール(Baudrillard, J)が行った構造主義的アプローチとは親和性が高いと思われ、敢えて文学的な解釈を排除せず、その形成プロセスの真実に迫っていききたい。

1-2) 価格形成とレアリティ

レコードの価格形成プロセスが神話と象徴という霧の中に在るにせよ、需要と供給という経済学の大原則の外には出ない。すなわち稀少な財に対して逼迫した需要があれば価格は暴騰し、幾ら需要があろうとも財が潤沢であれば価格は安定する。

コレクションの対象として集めるのは言う迄もなく前者で、顕著な例が「Please Please Me」の「ゴールド・パーロフォン・ステレオ盤」である。その詳細は後の項に譲るが、世界的な人気を博

する前という時期で、尚かつ当時の英国内ステレオ普及率が10%程度という事情のため、僅か1000枚未満という販売数が50～200万円という高値を招いている。一方で最後期に属する「Abbey Road」に際だったプレミアが付き難いのは、3桁のスタンパー番号で察せられる圧倒的なプレス数ゆえと考えられる。

1-3) 価格形成とオーソリティ

「オーソリティ(権威)」は神話形成の必須にして最大の要件の一と他ならない。客観的な判断基準の得難い領域では、その世界の専門家や実績あるメーカーまたはプレーヤー(すなわち権威)の評価が欠かせない。例えばクラシック音楽では批評家として影響力のあった作曲家シューマン(Schumann, R.)がブラームス(Brahms, J.)を世に送り出し、既に大家だったワーグナー(Wagner, R.)が新進のブルックナー(Bruckner, A.)にお墨付きを与えたの如しである。

ビートルズはEMIという大レーベルの後ろ盾あったにせよ、むしろ権威とは距離を置いて成長していった。1966年には当時の首相ウイルソン(Wilson, H.)の後押しでMBE勲章を受章したが、世界的な名声の後付けに過ぎない。当初はアイドルグループとして世界制覇を果たし、その絶頂期にステージ活動を引退してスタジオ録音に専念、やがてファッションや言動を含め時代を牽引するカリスマとなった。その圧倒的な成功こそが彼らを一種「神格化」させ、「ビートルズ神話」を誕生させた特異な例証といえる。

1-4) 価格形成と神話

ビートルズの世界的な成功は各国に膨大な数のファンを生じせしめた。また現役の8年および現在に至る40年の間、世界中にその動向が報じられたため、神話と象徴のボリュームとバリエーションは他の追随を許さない。そして世界中のファンの間で神話が共有され、共通の言語(または象徴)によるコミュニケーションが可能となった。

2. ビートルズの初版落札価格

ビートルズのレコードはオークションで常に落札の最高価格群に属している。以下では高価格の所以となる神話と象徴、およびその因果関係を論じる。ビートルズのレコードで顕著な価格形成の要因は「初版信仰」でそれを支える論拠が「音質神話」といえる。

A) 初版の判別材料(記号)

ビートルズの初版は象徴に溢れている。販売枚数は未曾有の数字に達して版が重ねられ、レーベルやジャケットの態様はプレス時期に応じて変化を見せる。それぞれの版を特徴付ける判別材料(記号)には事欠かず、単なる記号や番号、印字の大小や色合いが落札価格に確実な影響を与える。

B) 音質神話

そして初版信仰を支える主立った論拠はその音質で、一般に版の早い方がプレス版の劣化が少ないとされる。CDや日本のレコードでしかビートルズを聴いたことのない人が、英国オリジナル初版(概ねモノラル)で聞き慣れた曲を聴けば、否応なしに音質の鮮烈さや響きの豊かさに感じ入る。

日本ではビートルズのデビュー以来、その音楽は1990年代のCD普及までレコードで視聴されていた。また1970年代以降はステレオ録音が主流となるが、プロデューサーのジョージ・マーティンやエンジニアのジェフ・エメリックはデビュー作「Please Please Me」以来「White Album」に至る一連

のアルバムはモノラルでの聴取を前提と考え、最上のテイクはステレオでなくモノラルミックスに回された。

「もし、あなたがまだ60年代の英国モノラル盤を未体験なら、私は言いたい。「これまであなたが聴いてきたビートルズはコピー商品ですよ」と」*i。

エメリックはステレオ録音やCDの価値自体に疑義を呈している。

「ビートルズのCDを、ぼくは全般的にあまり高く買っていない。これらの曲はヴィニール盤でリリースされることを想定してレコーディングされ、少なくとも私見では、やはりそのかたちで聞かれるべきものだからだ。なかでも〈ペーパーバック・ライター〉と〈レイン〉のシングルは、ヴィニール盤で聞くとひととき輝きを増す。これはマスタリングの段階で、トニー・クラークが最新の機材——メンテナンス部門が開発した、あちこちをピカピカ点灯させる巨大な怪物を使えたことが大きい。その名を「オートマティック・トランジェント・オーヴァーロード・コントロール(自動過渡信号過入力制御装置)」、略してATOCというこの仕掛けのおかげで、それまでのシングルよりもずっと大音量でカットिंगすることができたのだ。残念ながら、〈ペーパーバック・ライター〉のステレオ・ミックスは、この曲の魅力を大いに損ねている。まるっきりバラバラで、バランスもぼくらの意図を一切くみ取っていない。ぼくにとっては、モノ・ミックスの方がずっとエキサイティングだ」*ii。

「信じがたいことに、アルバムのステレオ・ミックスはすべて、長い一日のうちに完了した。当時はステレオが普及していなかったため、ぼくらはもっぱらモノ・ミックスに力を入れていたし、ぼくらに関するかぎり、それこそがホンモノのミックスだった」*iii。

「真のビートルズ・ファンならば、ぜひとも《サージェント・ペパー》と《リボルバー》のモノ・ヴァージョンを入手すべきだろう。ステレオ・ミックスとは比べものにならないほどの時間と労力が、モノ・ミックスには投入されているからだ」*iv。

ジョージ・マーティンは「ステレオの左右の音を中心に集めたと考えれば、モノラルの音は必然的に4デシベル増加する」と説明している。また「Rubber Soul」や「Revolver」で顕著なステレオ録音の極端な左右分離(例えばヴォーカルを右に集め、楽器セクションを左に集める等)は、当時せいぜい3フィートしか離れていない2本のスピーカーのステレオ効果、およびその狭さゆえモノラル的に聴こえる場合の(めいめいの音の混ざらない)明瞭性の確保のためだった*v。いずれにせよステレオはリスナー環境および音質上の問題で副次的な存在と他ならなかった。

この様にビートルズのメンバーや制作スタッフはモノラル盤を重視していたが、音響の華やかさや音像定位の面白さのためステレオ盤の方が概ね高値を付けている。

以下に主としてステレオ盤における象徴の諸形態を例示して読み解いていく。

2-1) Please Please Me / ゴールド・パーロフォン・ステレオ盤《落札価格：\$ 4,000 ~ \$ 19,000@ CollectorsFrenzy 参照2013-11-2》

【神話】—— ビートルズという神話の誕生とその音質

「Please Please Me」はビートルズの記念すべきデビューアルバムになる。既にリヴァプールでは圧倒的な人気を博してはいたが、デビュー曲「Love Me Do」発売時は単なるローカルバンドだった。シングル盤「Love Me Do」の録音年月日はA面の「Love Me Do」が1962年9月4日で、B面の「PS I Love You」は同年9月11日。同年10月5日に発売されてヒットチャートの17位まで上昇した。

この歴史的なデビュー作「Love Me Do」はマネージャーのブライアン・エプスタインが地元リ

ヴァプルーで営む自身のレコード店で1万枚を買い、無償でファンに配布したと噂される。LPと比較すれば(殊に英国国内で)流通数が多いため、落札価格はマトリクスナンバー「1G」の様な最初期プレスが\$150～300で、シングル盤として破格の高さとはいえLPのゴールド・パーロフォンと比較すれば相当の廉価となっている。

同年11月26日および30日に録音され、翌1963年1月11日に発売された第2弾「Please Please Me」は遂にチャートの首位に輝き、プロデューサーのジョージ・マーティン(Martin G.)は商業的見地に基づいてLPの発売を急いだ。第1弾および第2弾のシングルで4曲は完成していたが、LP完成のために必要な10曲は僅か計585分(同年2月11日10:00～22:00)で録音された。アルバムの写真撮影には著名な写真家アンガス・マクビーン(McBean, A.)を起用、彼はマンチェスタースクエアビル内の吹き抜けの階段で、ビートルズが上から見下ろしているユニークな構図を考え出した。

「Please Please Me」の「ゴールド・パーロフォン・ステレオ盤」はビートルズの全アルバム中で最高価を付けている。パーロフォンは英国コロムビア(現EMI傘下で、当時はコメディを主力とした弱小レーベルだった。プロデューサーのジョージ・マーティンがパーロフォンの担当のため、ビートルズのレコードは1969年のアップルレーベル創立まで同レーベルで販売された。

その希少性の由来は、1963年4月26日発売に発売されたゴールド・パーロフォン・レーベルのステレオ盤が、EMIの方針で同年夏にイエロー/ブラック(Y/B)パーロフォンに一新された事である。当時の主流はリスナー環境(1960年代前半の英国でのステレオ保有率はせいぜい10%だった^{*vi})を反映して圧倒的にモノラル盤だったためステレオ盤は僅か2回のプレスで、初回(通称Dick James クレジット)は300枚程度だったとされる^{*vii}。マザー・スタンパー番号は1G(G=初回プレス)/1R(R=第2回プレス)または1R/1Gに限られ、ビートルズ全ステレオアルバム中の初版と容易に確認しうる。

トンプソン(Thompson, D.)著『The Music Lover's Guide to Record Collecting』の「世界で最も価値あるレコード」という項目では、先ずビートルズの全LPより次の2点を紹介している。1点目は米国デビュー盤「Introducing the Beatles」の「Ad Back(ジャケット裏面広告)」または「Blank Back(ジャケット裏面空白)」版で、2点目がゴールド・パーロフォンのステレオ盤。ただし前者の落札価格は\$500～\$5,000で、ゴールド・パーロフォンのステレオ盤(\$5,000～20,000)には遠く及ばない。米国書ならではの身最眞の感は拭えない。とはいえゴールド・パーロフォン・ステレオ盤はビートルズ全アルバム中ベスト2の内の1に掲げられ、際だった希少性の認識は揺るぎない。

【象徴】—— ゴールド・パーロフォンとステレオ表記

「ゴールド・パーロフォン」は黒地に金文字という重厚感あふれる意匠で、1950年代から使用されているレーベルだった。

日本のビートルズ関係書では以下の様に述べられている。

「まだステレオ機材が高価で、持っている人が少ない時代だったので、LPのレーベルも金色を使用し、おもいっきり高級感を出している。LPレコードが贅沢品だったことがわかる。クラシック音楽には似合うが、ビートルズのようなポップ・グループにはどうも似つかわしくないデザインだ。しかし、今となってはこの古めかしさが、このレコードのプレミア度を上げるにふさわしいか^{*viii}」。

「レーベルの黒もY/B(筆者注：黒地に黄文字のイエロー・パーロフォンを指す)のものとは違い、まるで炭鉱から掘り出されたばかりの黒炭のよう。鈍く光る漆黒の中から金文字が浮かび上がるクラシックなデザインで、盤はずっしりと重い^{*ix}」。

「ゴールド・パーロフォン」の主たる価値はまさにゴールドという色ゆえという点で意見は一致している。また1963年というステレオ初期盤とはいえ「ゴールド・パーロフォン」は好録音として評価が高い。その後の多重録音と違ってマイク2本で収録したがゆえのシンプルさがクリアな音質を実現させている。

またプロデューサーのジョージ・マーティン、チーフエンジニアのノーマン・スミスに加え、後年「Revolver」「Sergent Pepper's Lonely Hearts Club Band」「Abbey Road」でチーフエンジニアを務める名手ジェフ・エメリックが脇を固め、既にして録音の体制は万全だった。エメリックは「Sergent Pepper's...」「Abbey Road」およびポール・マッカートニー&ウイングスでベストエンジニア・アルバム賞を獲得（「Abbey Road」はフィル・マクドナルドとの共同受賞）、2003年には長年の功勞に対して贈られる特別賞（技術賞）を獲得している。

コンプレッサーやエコーの効いた音はたしかにビートルズのエネルギーギッシュなボーカルや演奏を生々しく伝えている。

「乾いたハンドクラップはこの盤でしか味わえない。同じマト（筆者注：マトリクス）でも、プレスが進むにつれてだんだんと音が湿って重くなってくるからだ。未だ爆発的な人気を得る前と言うこともありプレスの絶対数が少なく、With The Beatles以降と比べ盤のオン溝の劣化が少ないことは明らか^{*x}。

「『プリーズ・プリーズ・ミー』のゴールド・レベルを聴くまでは、初期ビートルズはオールディーズっぽいものだとばかり思っていた。だから、驚いた。パンクっぽくてゴリゴリしているその音は、シンプルなバンド・サウンドを刻んだアルバムでは最高的一枚だと思っていたエルヴィス・コストロの『マイ・エイム・イス・トゥルー』の音にそっくりだったからである。もちろん、「あ、逆か」と思った。ニック・ロウガリヴァプール出身のエルビス・コストロのデビューに「『プリーズ・プリーズ・ミー』の音」を用意したと知ったとき、私は改めてビートルズのすごさを実感し、それまでの不理解を恥じた^{*xi}。

ただし一般に音の割れやすいレコード内周部の楽曲（たとえば「Please Please Me」）ではハーモニカやコーラスに盛大な歪みが入る。手放しで高音質とは言い難い録音で、その評価は単なる原音忠実性の判断を越えた「神話」の領域と思われる。

2-2) With the Beatles —— ジャケットの書体・誤植

1963年11月22日に発売されたビートルズのセカンドアルバム。同年4月11日発売のシングル「From Me to you」で英国内の人気を沸騰し、ファーストアルバム「Please Please Me」はアルバムチャートの首位に立った、まさにブレイクの最中に録音されたアルバムである。本アルバムは予約だけで30万枚という英国レコード市場で前例のない大ヒットを記録。「Please Please Me」に代わって首位に立った27日付の英国アルバムチャートでは21週間その座を守った。1965年の9月には英国人による英国初の100万枚アルバムとなった。

ジャケットの“STEREO”表記は大中小の3サイズで、この順番で初期となるためプレス時期の判別材料とされる。更にレーベルではB面3曲目が“You really Gotta Hold On Me（“正しくはYou Really Got A old On Me”）という誤植で以降の版と区別される。

EMIは前作「Please Please Me」でゴールド・パーロフォンのレーベルを「Y/B（イエロー・パーロフォン）」と呼ばれる黒地に黄色のものと改めた。1969年以降は黒地にシルバーのレーベルで、1969年のものは長方形の囲みにEMIのロゴがあるため「EMI ONE BOX」、1970年以降はそのロゴが

上方・下方の2つとなるため「EMI TWO BOX」という。

Y/Bは英国盤のオリジナル若しくは初期版ゆえ一定のブランド力(神話性)を持ち、ONE BOXやTWO BOXは英国盤としていちおうのprestigeを持つとはいえ、往々にして鮮烈さや個性、更には希少性という点でY/Bの後塵を拝し、オークションでは圧倒的に格下の扱いとなる。ただし音の歪みやアンバランスに調整が施された結果、例えば「Help!」マトリクス-5/5の音質はY/Bに勝るとも劣らぬとされ、神話と象徴の意味合いは否定しえない。

2-3) A Hard Day's Night —— レーベルの書体

1964年7月10日発売に発売されたビートルズ初の主演映画のサウンドトラックで、音楽映画として空前のヒットを記録。7月15日付の全英アルバムチャートで初登場1位、次作「Beatles For Sale」にその座を明け渡すまで21週連続首位を守った。予約注文数は「With the Beatles」を下回る25万枚だったが、年末には60万枚に達して翌年春までに75万枚のセールスを記録している^{*xii}。

オリジナル盤のマトリクスはYEX126-1/YEX127-1で、初版は“STEREO”および“PCS 3058(カタログ番号)”の書体が幅広で、次の版では縦長ゴシックに変化している。

2-4) Beatles for Sale —— レコード外周の文言・誤植

未だ全米アルバムチャートの首位にあった前作(『A Hard Day's Night』)の僅か5ヶ月後(1964年12月4日)に発売され、同アルバムと首位を交代して9週間その座を守った。31週間にわたってトップ10位内にランクインし、販売数は英国国内だけで翌年100枚に達した。

初版のマトリクスはYEX142-1/YEX143-1で、それまでレコード外周の文言は「THE PARAPHONE…」で始まっていたが、初版発売直後に「THE GRAMOPHONE…」と改められた。「THE GRAMOPHONE…」レーベルでは第2版のA面2曲目“I'm a loser”が“I'm a loss(er)s(が一つ多い)」、出版社名の“Northern Songs”が“Northern Songss(末尾のsが1つ多い)”という誤植のため初版と異なる。第3版では“Songs”は修正されるが“loss(er)s”は未修正のため第2版と区別される。

2-5) Help! —— レーベルのアスタリスクの位置

1965年8月6日に発売された同名映画のサウンドトラック。A面に映画のBGMを収め、B面は名曲として知られる「Yesterday」を始めとした新作である。全英アルバムチャートでは8月11日付で初登場1位、11週に渡って首位を守って売上は90万枚に達した^{*xiii}。

オリジナル盤はマトリクスYEX168-1/YEX169-1で、レーベルのA面4曲目“I NEED YOU”の後ろにアスタリスク(*)のある盤が初版とされる。その後アスタリスクは同曲の前に移動したため、その位置でオリジナル初期盤での微妙なプレス時期の違いが分かる^{*xiv}。この相違は概ね1万円程度の価格上昇材料となるが、英米を中心としたマニアの方はより豊富な知識を備えていると見え、落札価格の影響は日本以上に大きい。

2-6) Rubber Soul —— マトリクスナンバーと隠語

1965年12月3日に発売されて同月8日付の全英アルバムチャートで初登場1位。12週間に渡って首位を守った結果、翌年春の販売数は75万枚に達した。

初版のエピソードとして名高いのはモノラル(マトリクスXEX579-1/XEX580-1)で、EMIは音圧の高さゆえの針飛びを危惧し、11月19日にはマトリクスを差し替えている。同マトリクスは音の

大きさと希少価値のため「Loud Cut」としてマニアの注目を集め、概ね2万円～5万円程度の高値を付けている。これはマトリクスやその隠語（「Loud Cut」）が価値ある（蒐集に値する）レコードの象徴として機能している好例といえる。

ステレオ盤はラウドカットと同じレーベルが初版と押し量られるが、同デザイン（フォントは Sans Serif 体）で YEX178-2/YEX178-2 および YEX178-2/YEX179-3 が混在する一方、フォントの Serif 体バージョンでも YEX178-2/YEX178-2 と YEX178-2/YEX179-3 が併存している。すなわち初版と目される Sans Serif バージョンのレーベルの盤が YEX178-2/YEX179-3 で、第2版と思しき Serif レーベルが次期プレスの YEX178-2/YEX178-2 というねじれが生じる。これは必ずしもレコード盤とレーベルが1対1の対応とはいえず、それぞれ別々に製造したものを合わせたと考えられる。

2-7) Revolver —— マトリクス・別リミックスと隠語

1966年8月5日に発売されて8月10日付の全英アルバムチャートで初登場1費。7週間その座を守って年内の売上数はおよそ50万枚に達した。

「ラウドカット」と類似の理由でモノラル初版（XEX605-2/XEX606-1）の人气が高い。B面最終曲“Tomorrow Never Knows”でリミックス11（Remix 11）というモノラルミックスを採用した初版が発売された直後、ジョージ・マーティンはリミックス8の方が上出来だったと考えて XEX605-2/605-2 に差し替えた*^{xv}。

“Tomorrow Never Knows”はそれまでのポップ・アイドル色を完全にぬぐい去る前衛音楽で、次作「Sergent Pepper's...」で色濃いサイケデリック的性格の先駆けとされる。それまでアシスタントだったジェフ・エメリックはこのリヴォルヴァー最初の録音でチーフエンジニアとしてデビューし、メンバーの要請に応じて様々な録音技術上の実験を行っている。たとえばジョン・レノン は自分の歌声に対して「山頂にいるダライラマ」というイメージで音響のアレンジを要望したとされ、SEはポール・マッカートニーの主導でめいめいが家で用意した音の素材を持ち寄って作られた。“Tomorrow Never Knows”は音楽的な先駆者としてのポジションを決定づけた点でエポックメイキングな曲と他ならなかった。リミックス11の価値は曲自体のエピソード性で尚のこと高まったといえる。

この様なストーリー性と希少価値のため「リミックス11」は状態のよい盤であれば \$ 1000 ～ 2000 の高値で落札される。

ステレオ盤初版の判別材料はB面4曲目の印刷で、初版は“Dr. Robert”で次版は“Doctor Robert”となっている。落札価格で数万円の価格差を生むため、初版のオークション商品解説では概ね“Dr. Robert表記”と明記される。

2-8) A Collection of Beatles Oldies

1966年12月10日の発売。EMIとの年間2枚発売というアルバム契約の遂行が不可能となったためベスト盤を編むことで合意。新味のないアルバムゆえチャートは最高位6位だった。レーベル serif 体の初版はスタンパー番号1桁で2万円未満という廉価。

2-9) Sergent Pepper's Lonely Hearts Club Band —— ジャケット形状

1967年6月1日発売。英国では予約だけで25万枚を数え、5月31日付のアルバムチャート初登場1位で22週間その座にあった。英国450万枚およびアメリカ1,100万枚を始め全世界で3,200万枚の

セールスを記録。

初版プレスはモノラルおよびステレオで50万枚以上とされる。大量生産方式が確立したせいも初版マトリクス(YEX637-1/YEX638-1)は1969年後半のEMI one boxに至るまで使用された。初版は“SOLD IN U.K.…”表記で判別しうるが、それ以上に「Wide Spine」と呼ばれる背の厚いジャケット形状が人気を注目を集めている。ポール・マッカートニーがEMIに対して「ジャケットの厚さをインパルスのジャズ・アルバムと同じにして欲しい」と要求し、社長が直々にポールを訪ねて「セカンドプレス以降は通常のものに変えたい」と伝えた日わく付きである。

こうした神話のエピソードと歴史的名盤の初期プレスの証しとして、「ワイドスパイン」はコレクターズアイテムの象徴となっている。ただしスタンパーの若い盤で「ワイドスパイン」と比較して背の薄いジャケットのあるため厳密に言えば初版の証明ではない。

2-10) Magical Mystery Tour(米国編集盤) —— モノラル盤の希少価値

1967年11月27日発売(米国キャピタル社)。英国発売の正式13LPの1つとはいえ同国では当初2枚組EPの販売で、LPは米国キャピタル主導で作られた。A面は英国盤EPでB面には1967年のシングル曲を収録している。1968年1月6日付の全米アルバムチャートで首位に立って8週間その座を守った。トップ200にトータルで78週というロングセラーを記録し、キャッシュボックスの年間ベストセラーで9位に入った。ステレオ盤が主流となった時期ゆえモノラル盤の希少性は蒐集家の人気を集めている。

2-11) Yellow Submarine —— モノラル盤の希少価値

1969年1月17日発売。ややマジカルミステリーツアーと似たポジションで、A面は地味なオリジナルでB面はジョージ・マーティンのサントラゆえ商業的には成功しなかったが、その希少価値ゆえモノラル盤は相当のプレミアが付く。

2-12) White Album —— シリアルナンバーの神話

1968年11月22日発売。ビートルズ初の2枚組LPで1968年11月27日付の全英アルバムチャートでは初登場1位で9週間その座を守った。アメリカでは予約だけで190万枚という前代未聞の数字を弾き出して9週間連続1を記録。キャッシュボックス誌では計12週首位に立ち、1969年度年間ランキングで4位に入った。全米レコード協会(RIAA)によればアメリカ国内での累計売り上げ数は900万(1800万枚)セットに達し、2枚組アルバムのセールスとして米国で史上最大のセールスを記録した。また『Rolling Stone's 500 Greatest Albums of All Time』(Wenner Books 2005)では10位にランクされた。

大量販売に対応しうる大量生産性が整ったため相当数の初回スタンパー(モノラルはXEX709-1/710-1/711-1/712-1 ステレオはYEXで同ナンバー)が出回っている。初版の判断基準はレーベルの“An E.M.I. Recording”表記なし。しかしジャケットのレアリティが圧倒的に勝るといえ、トップローディング(top loading = 上部がレコードの出し入れ口)の有無や表面のシリアルナンバーの数がプレミア度の判断材料となる。殊にシリアルナンバーは落札価格に決定的な影響を与え、「0000005」番は2008年のeBayで£19,201の高値で落札された。かつてジョン・レノンの持ち物だった「0000001」は現在リンゴ・スターの手にあるとポール・マッカートニーは証言している。一ケタ台は親しい友人や親類等に贈られた可能性が高いため弥が上にもその神話性が高まる。

2-13) Abbey Road —— ジャケット上のロゴの位置

1969年9月26日発売。全英チャートで初登場1位を獲得して18週間その座をキープしてトップ30内に36週間とどまった。初版はレフトアップル(left Apple=ジャケット裏のアップルロゴが後期盤と比較して左方に印刷されている)および最終曲“Her Majesty”表記なしで、初回マトリクスのYEX749-2/YEX750-1は相当数が流通したため際だったプレミアは付かない。ただし輸出用にEMIがデッカ社に委託して製造したとされるY/Bレーベルのアビーロードの落札額は相当の高値となる。Y/Bというデザインの魅力や通常版の流通量に比して圧倒的に高い希少性、更には音質で定評のあるデッカというブランド力ゆえと思われる。

2-14) Let it Be —— マトリクスナンバー(2U/2U)

1970年11月6日発売。この普及版LPの発売に先立ち、既に写真集の付いたボックスセットとして販売されて(1969年5月8日)計6週間のナンバーワンを記録している。初回マトリクス(YEX773-2U/YEX774-2U)で一定のブランド力を有して商品表記に特筆されるが、Abbey Roadと同じく相当数が流通したため特段のプレミアは付かない。ただし状態のよいボックスセットの落札価格は非常に高価となる。

3. 落札価格の形成要因～クラシック音楽

次に紙幅の許す範囲でクラシック音楽のレコードについて検討していく。クラシック音楽は長い歴史と世界的な権威あるがゆえ《神話》には事欠かない。またそのレコードではレーベルの神話性/象徴性が高いため以下では演奏家にまつわる【神話】とレーベルの謂われを中心とした【象徴】に区分けて述べていく。

3-1) フルトヴェングラーフルトヴェングラー (Furtwängler, W.) 指揮バイロイト祝祭管弦楽団 同合唱団 シュワルツkopf (Schwarzkopf, E.) 他 ドイツ初版 (HMV WALP 1286/87)《落札価格: 約 \$ 800 ~ 1200 @ CollectorsFrenzy 参照 2013-11-2》

【神話】大指揮者の唯一の「第9」録音

多くの録音が残されているクラシックの音楽家では、フルトヴェングラーは恐らく最大の畏敬を集める存在といえる。世界最高峰のオーケストラ双璧とされるベルリン・フィルハーモニーおよびウィーン・フィルハーモニーの常任指揮者を務め、1954年に68歳で逝去まで常に当代の第一人者と目されていた。ステレオ録音の時代にあと一步で間に合わず、残されたモノラル録音の音質は良好とは言いが、幾つかのレコードは相当の高値を付けている。

フルトヴェングラーとして名高い録音といえばバイロイト音楽祭(1951)でのベートーヴェンの第9交響曲である。この録音はドイツ、イギリス、フランスを初め、日本、イタリア、スペイン、オーストリアなど多くの国で発売されたが、独自のスタンパーをカッティングしたのはドイツ、イギリス、フランスだけで、その他の国ではイギリスかフランスでカッティングしたスタンパーが使用された。独自のスタンパーをカッティングしたドイツ、イギリス、フランス盤の音質はそれぞれに特色ある音作りがなされ、ドイツ盤は低重心で締まった音、イギリス盤はバランスの整ったやわらかな響き、フランス盤は高音が伸びていて華やいだ音とされる^{*xvi}。

ドイツ初版は赤い色紙の上にモノクロの表紙を施しているため「赤箱 (Red Box)」と通称され、落

札価格はほぼ同じ箱装とレーベルの初期盤(第2版および第3版)と比較して倍(\$800~1000程度)となっている。英国初版は概ね初期盤の落札価格に近い。

【象徴】「赤箱」および半円ニッパー

初期盤は重厚感に溢れる布張りの箱で、内側の紙袋は糸で縫い合わされ、レコードが高嶺の花だった頃の雰囲気伝わる。所有の喜び(=優越感)を与える装幀で、初版の証たる「赤箱」はその象徴と他ならない。レーベルは半円ニッパーで最初期盤は中央下部の33回転マークの囲みが四角。半円ニッパーの左下は正方形のELECTROLA印の表記で、版を重ねるに連れ33回転マークの囲みは逆三角形が増え、ELECTROLA印は「FREI」から「BIEM」へと変更される*xvii。

ただしその演奏に関してマーカス(Marcus, M)は以下の様な苦言を呈している。

「フルトヴェングラーの《第9》のレコードが、これ(1951年のパイロイト版)以上はないということは、悲しいことだ。フルトヴェングラーが、この曲をどう掴んでいたか、十分感得できる演奏だが、演奏の技術に欠陥が認められるので、かならずしも、彼を記憶するにふさわしいレコードとはいえず。彼のやり方に、もっと慣れたオーケストラの演奏だったら、間違いなくこれ(も、そうだが)以上に、高貴な《第9》になっていただろう。

(中略)本当にレコードで聴きたいのは、1954年、ルツェルンで行われたあの驚異的演奏だ。オーケストラは、フィルハーモニアだった。これが、日の目を見られないのはスイス音楽か組合の規定によると聞いている。だが、あれがレコードで聴けたら、どんなに素晴らしいことだろう*xviii。

2013年に発売された7枚組LPのフルトヴェングラー名演集(ターラ)はルツェルンの第9を所収し、パイロイト盤と比較にならぬ演奏レベルと音質の高さを聴かせる。7枚組にはパイロイト盤のドイツ初版と落札価格を競いあう「ウラニアのエロイカ」が含まれる。日本の落札価格は3万~20万円(@aucfan参照2013-11-2)、海外では\$200~\$1200(@CollectorsFrenzy参照2013-11-2)と激しいばらつきを示すが、市場での需給バランスや盤としての評価の不安定性ゆえと思われる。

「ウラニアのエロイカ」はフルトヴェングラー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団演奏のベートーヴェン交響曲第3番で、フルトヴェングラーの存命中に米Urania社の発売したレコードである。フルトヴェングラーは版權を巡って同社を告訴し、幻の名盤と化して市場価格の高騰を招いた。

平林直哉は「ウラニアのエロイカ」に関して以下の様な問題点を指摘する。

「まず問題なのはピッチである。通常の33回転で再生するとほとんどホ長調に近い。もう一つはイコライゼーション。このLPはNABでカットされているため、その後の世界標準となるRIAAで再生すると、かなり高音がキンキンする。しかも、このURLP盤自体の音がかもともと低域が薄く、高域がやや強いので、普通に再生するとピッチは高いし、音も金属的でまともに聴けない代物なのである。それでも、「これが最高」と言う人も多いが、こうなると音楽鑑賞というよりは信仰といった方が良いでしょう。

(中略)(このターラ盤は)LPとしては過去最高の音質であり、その点を考慮すればURLP盤はもはやその役目を終えたといえる*xix。

「ウラニアのエロイカ」のジャケットはビュッフエ(Buffer, B)の絵画と似た個性的なイラストで、美麗とは言い難いが好事家には一定の象徴性を持つと思われる。新たに登場したターラ版のパイロイト盤および「ウラニアのエロイカ」の市場価値に与える影響度は、両盤の神話性を測るメルクマールとして興味深い。

3-2) バルビローリ (Barbirolli, J.) 指揮ベルリンフィル(Berlin Phil Harmonic) 演奏「マーラー (Mahler, G.) 交響曲第9番」初版

僅かな期間を置いて別売された2枚のレコード(ASD596/597)で、第1～3楽章を1枚におさめ、第4楽章は2枚目の片面に録音。ASD版のラベルは半円ニッパー。《落札価格：約7～10万円@CollectorsFrenzy 参照2013-11-1》。

【神話】希少性の高い録音と専門家のお墨付き

この盤でも演奏のストーリー性(神話)が価格に影響を及ぼしている。1963年にジョン・バルビローリがベルリンフィルを客演指揮した際、楽団員全員のたつての希望で演奏が申し込まれてレコーディングが実現している。ベルリンフィルは当時ドイツ・グラモフォンの専属ゆえEMIで録音すること自体が異例で、イギリス人指揮者と同オーケストラの録音は1937年のトーマス・ビーチャム(モーツァルト「魔笛」)以来だった。

この消息をカリスマ的な音楽評論家・故吉田英和は以下の様に記している*xx。

「19世紀末から20世紀の初めにかけての孤高の天才の最高の傑作であるところのこの大作を、イタリアの指揮者がやるというのがすでに例外であるうえに、ベルリンでは、いつぞや、こことは長い間まるで縁のなかったサー・バルビローリが来て、いきなり、この交響曲をふって、熱狂的な感激をもって迎えられるで以来というもの、ほかの指揮者はこの曲を敬遠する傾きがあった。何しろバルビローリのおさめた成功は、聴衆や批評家からばかりではなかった。あのやかましいベルリン・フィルハーモニーの楽員たちもすっかり感激してしまい、予定も何もなかったのに、この曲の、この顔合わせの演奏によるレコードが特別に発売されたくらいだったのだから。

「これは、ヴァルターの指揮した何枚かのマーラーのものと同様に、およそありとあらゆるマーラーのレコードの中、迫力といい、魅力といい、最もすばらしいものというほかないものである。密度も濃くて、空虚なところがまったくない。畑中良輔氏のよく使う言い方を拝借すれば(完全に燃焼しつくした)演奏の記録にほかならない。私には、正直、バルビローリは、何といってもマーラーがよく、あとは、言ってみればもうおまけでしかないのである」。

【象徴】ASD版・半円ニッパー

「ラベル(半円ニッパー)」は初版の証明とされ、ALP版は同一ラベルデザインなのに「初期」盤ゆえ価格は4分の1程度に落ちる。いわゆるボックスセットでなく1枚ずつ個別に販売された点や、リハーサル風景を収めた地味なジャケットデザインの象徴性は、少なくとも象徴性を際立たせるポイントとは考え難い。仮にフルトヴェングラーの合唱交響曲(ベートーヴェン)・パイロイト版の様なボックスセットであればマニアックなニーズを更に喚起し得たものと思われる。逆にいえばそうした象徴性の存在なしに高い人気を獲得した点で、本盤の際だった価値の高さが窺える。

3-3) カラヤン (Karajan, H.V.) 指揮 フィルハーモニア管弦楽団演奏「リヒャルト・シュトラウス (Strauss, R.) ばらの騎士」英国盤初版 《落札価格3万円～10万円未満@CollectorsFrenzy 参照2013-11-2》

【神話】オールスター・キャストと高音質

カラヤンは没後なおクラシック音楽界に「帝王」として君臨し、その知名度とカリスマ性で右に回る者はないが、意外なほどプレミアのつくレコードが少ない。カラヤンはCDの開発で多大な協力を行うなど、クラシック音楽ひいてはレコードなど商品の大量生産と普及に積極的だった。そのため彼のレコードはおのずと希少性が薄れ、プレミアと縁の薄い商品となったと思われる。

そのほぼ唯一の例外はリヒャルト・シュトラウス (Strauss, R) の「ばらの騎士」で、オークションの落札価格は比較的高い水準で推移している。カラヤンは歌劇場専属の指揮者としてキャリアを重ね、オペラの指揮で定評のある上、シュトラウスの音楽を得意としていた。歌手陣はエリザベト・シュワルツコプフ、クリスタ・ルードヴィヒ、ニコライ・ゲッタなど、オペラ界に燦然と輝く名歌手を揃え、見せ所の多いホルンには早逝の天才、デニス・ブレインを迎え、これ以上は望むべくもないキャストだった。また著名な技師クリストファー・パーカーの手で録音された初期ステレオの音質は専門家や愛好家の圧倒的な支持を受けている。当時ステレオは未だ実験段階にあったため、セッションのプロデューサーだったウォルター・レグはステレオ録音に直接タッチしなかったが、録音されたテープを聴いて「これは奇跡だ」と嘆賞した^{*xxi}。

【象徴】B S (Blue Silver) の SAX

この様にカラヤンの「ばらの騎士」の評価ならびに人気には合理的な裏付けがあるが、初版(英国コロムビア SMS 1003 SAX2269/72)の落札価格は際だって高い。ドイツ盤初犯との価格差は3倍以上、米国コロムビアでは10倍程度に達する。「本家」イギリス版コロムビア(EMI社)の優秀性に寄せる信頼に加え、4枚組ボックスセットという同一形態での大幅な価格差にはオリジナル(「SAX」)信仰の存在が見取れる。

オリジナルのレーベルは薄いブルー(blue)を銀色(silver)のラインで縁どった「BS(blue-silver)」。

1950年代～1960年代前半のEMIは数多くの有名ミュージシャンと独占的契約を結び、録音技術に定評のあったため、SAXの初期盤として高い評価とブランド力を有している。

オークションでBSまたはBlue Silverの盤は概ね高価で、殊にレニード・コーガン(Kogan, L.)のバイオリン演奏とコンドラシン(Kondrashin, K.)指揮によるラロのスペイン交響曲初版(1960, BS)の落札価格は70万円前後の高値を付ける。旧ソビエトで活躍したコーガンは1955年のアメリカ合衆国デビューで成功を収めるが、米ソの冷戦下で反ソおよび反ユダヤ運動の標的とされ、西側での活躍の機会は少ないまま1982年に58歳で逝去している。そのため録音状態のよいレコードが少なく、コーガンの実力は疑いないとはいえ、落札価格の天井知らずの高値は需要と供給の関係および希少性に基づく熱狂(craze)に由来すると思われる。

3-4) ダニエル・バレンボイム(Balenoim, D.) 指揮 ジャクリーヌ・デュ・プレ(チェロ) シカゴ交響楽団 演奏「ドボルザーク(Dvorak, A) チェロ協奏曲」英国盤初版《落札価格1万円～2万円》

【神話】早逝の天才的アイドル・チェリスト

チェロ奏者のデュ・プレは10歳で国際的コンクールに入賞し、12歳でBBC主催のコンサートに出演するなど早熟の才を開花させた。1961年に16才で正式デビュー。このとき支援者より贈与された1713年製ストラディバリウス「ダヴィドフ」(ストラディバリウスの制作した60丁余のチェロで有数の銘器)が生涯を通じての愛器となった。以来エルガーのチェロ協奏曲の独奏者として、英国の国民的音楽祭「プロムス」の常連に名を連ね、国内で大衆的な人気を集めた。1965年に巨匠バルビローリと録音したエルガーのチェロ協奏曲は彼女の世界的な評価を決定づけ、翌年(21歳)には著名なピアニスト・指揮者のダニエル・バレンボイムと結婚。しかし1971年(26歳)から指先などの感覚の鈍化を覚え、1973年に多発性硬化症と診断されて事実上引退。1987年(42歳)に同病のため死去した。

彼女の遺したレコードは再版を重ね、実妹によるその私生活の暴露的な著書が映画化されるなど、今なお不世出の音楽家ならびにアイドル的なアイコンとしての存在感は色褪せない。ドボル

ザークのチェロ協奏曲の録音は難病発症直前(1970年11月)で、夫婦共演による短い絶頂期の記録という意味で歴史的価値が高い。

【象徴】「カラー・ニッパー・スタンプ(Color Nipper Stamp)」

初版レーベルは英国EMIのセミサークル(半円)のスタンプニッパー。リードマークのニッパー犬のイラストが白い縁のためスタンプ(切手)の様に見えるのでスタンプニッパーという。スタンプニッパーはカラーとモノクロの2種で、概ねASD2470～2750のオリジナルはカラーニッパー、それ以降はモノクロがオリジナルとなる。ASD2751という過渡期にある本盤は「カラースタンプ(Color Stamp)」がオリジナルで、aucfanとCollectorsFrenzyの平均落札価格はほぼ同額の1万3千円程度となっている。

これはモノクロニッパー(Black White Stamp)と比較して数倍の価格差で、ASDシリーズの半円スタンプニッパーのLPにおけるプレス技術と盤質の定評でいえば^{*xii}、明らかな象徴性の存在が認められる。因みにフランスでの初版はカラーニッパーの半額程度となっている。また彼女のエポックメイキングの名盤・エルガーのチェロ協奏曲は販売数の多さゆえか目立ったプレミアは付いていない(\$50～85@CollectorsFrenzy 参照20130-11-2)。

レコードの落札価格の形成は神話と象徴の産物といえ人間心理の生々しい反映と他ならない。次なる課題は神話の神話たる所以すなわち現実との乖離の分析、および筆者の主たる関心事としての仏教的省察である。2500円のレコードに10倍～100倍の高値の付きうるメカニズムの分析を進め、神話の虚実を明らかに、仏教的見地で省察を加えることを残された課題と定めて研究ノートの結びとする。

*i 和久井光司 前掲書, p.13

*ii エメリック(Emeric, G.), マッセイ(Massey, H.), 奥田祐士訳, 2006, ザ・ビートルズ・サウンド最後の真実, 白夜書房, p.184

*iii エメリック他 前掲書, p.203

*iv エメリック他 前掲書, pp.265-266

*v Spitzer他前掲書, p.204

*vi Spizer, B., 2011, Beatles for Sale on Paraphone Records, 498 Productions L.L.C., p.130 *ビートルズのレコードの初版判別材料は本書および井上ジェイ, 宮田菊俊(写真), 2011, ビートルズUK盤コンプリート・ガイド, 音楽出版社, に拠った。

*vii 和久井光司, 2013, ザ・ビートルズ・マテリアル(レコードコレクターズ4月号増刊), 株式会社ミュージックマガジン, p.19 *ビートルズのレコード販売数は本書に拠った。

*viii 井上ジェイ他前掲書, p.31

*ix 湯浅学, 2012, アナログ・ミステリー・ツアー 世界のビートルズ1962-1966, 青林工藝舎, p.22

*x 湯浅実 前掲書, p.22

*xi 和久井光司 前掲書, p.13

*xii 和久井光司前掲書, p.44

*xiii 和久井光司前掲書, p.69

*xiv 井上ジェイ前掲書, p.64

*xv Spitzer他前掲書, p.216

*xvi CLASSCUS HP, <http://www.classicus.jp/catalog/special.html> (参照2013-11-2)

*xvii CLASSCUS HP, <http://www.classicus.jp/catalog/special.html> (参照2013-11-13)

*xviii ギリス(Gillis, D), 1969, フルトヴェングラー頌, 仙北谷晃一訳, 音楽之友社,

*xix 平林直哉, 2013, 密度のある音、何とも言えない柔らかい肌触りはLPならでは。、フルトヴェングラー名演集

解説書, King International, Inc.

*xx 吉田秀和, 世界の指揮者, 吉田秀和コレクション, 筑摩書房,

*xxi 嶋護, 2011, クラシック名録音106究極ガイド, Stereo Sound, p.125

*xxii ペーレンプラッテ, 2013, LP鑑定法, <http://www.b-platte.com/opinion/> (参照2013-11-1)